

雪の中の果無越え

3月中旬に山の会で熊野古道果無越えを歩くが、別ルートからのメンバーとの合流に使う櫛佐古からの登山路がどうなっているか気になった。一度見ておこうと思い立ち、3日早朝5時に家を出た。途中仮眠をとり**7時30分**に櫛佐古バス停着。

櫛佐古からは苔むした石段（右写真）が続き、果無越えの古道を飾る小さな石仏がここでも黙って見守ってくれている。

8:05 果無集落で十津川温泉からの道に合流。石畳の道を軸に農家が散在し、路傍には菜の花と桜が咲き誇っている。

集落の中を蛇行しながら上る車道をショ



ートカットしつつ石畳の道を上へと辿る。墓石に刻まれた「文政〇年」の文字も古道にふさわしい情景。

山道には、まだ花は見当たらないが、フキノトウが包みを解きかけており、そのグリーンがいかにも美味しそう。

行く手に果無山脈が聳え、その稜線に白く輝いているのは雪だろうか。

8:50 天水田着。ここは山中の茶屋の人が雨水だけをたよりに稲田を開いたところだと言う。尾根上の開けた平地で前回訪れた時には何種類かの花が見られたが、この日はわずかにアセビが咲いているだけだった。

9:10 山口茶屋跡に着く。平たい土地とその周りに植えられていた杉の巨木が在りし日を偲ばせるのみ。

9:40 観音堂。ここにはゴムホースで谷水が引かれ、勢いよく流れ出しているが、その周辺は石も草も氷に覆われて、ちょっとした芸術作品の様。

途中から降り出した雪が、瞬く間に積もっていく。「アイゼンを持ってくるべきだったか」と瞬間思ったが、これは杞憂に終わった。



10:15 果無峠着。サラサラした小粒の雪を頭や肩で受けながら観音石仏が黙って見上げている。「雪の日に物好きね」とも言いたげ。

ここで右折し、果無山脈縦走路に入る。ブナ、ヒメシャラ、リョウブ主体の明るい広葉樹林の中を尾根道が続いている。幼木を周囲に伴ってブナの巨木が何本も生い茂っている。尾根筋の厳しい風雪に耐えてきた樹々は身をくねらせながら天空に枝を大きく伸ばし、この山の主であることを昂然と示している。

ブナに元気ももらい、ヒメシャラの美しい幹を愛でながらゆったりと歩いて 10:50 石地力山（果無東山）山頂に。

県か村の職員らしい二人連れが、間伐状況の検査に来ていた。ここのブナ林の素晴らしさを話し合い、さらに西に向かう彼らと別れて、往路を引き返し、十津川温泉側に下り立ち、国道を出発点まで歩いた。

《長い国境の山脈》

今日歩いたこの果無越えは十津川沿いの道が出来るまで、高野山～十津川～熊野を結ぶ街道であり、難所の一つとされたらしい。また果無山脈は紀伊と大和を分かち山並みで20キロ以上続き、「果て無し」と呼ばれた所だろうか。

十津川温泉側の登山口近くに向井去来（芭蕉の弟子で長崎出身）の句「つづくりもはてなし坂や五月雨」の句碑がある。「つづくり」とは道普請のこと。

タンポポ調査にご協力ください

日本のタンポポが危機だとされています。奈良県でも西洋タンポポの侵入が目立ち、又それと在来の日本のタンポポとが交じり合って交雑種が多く生まれているのです。

このタンポポの実際の生態をつかむ調査が近く行われます。ご協力いただける方、松尾までご連絡ください。



以上 81 号